

## 「雁回山の植物を見る会」活動10年を振り返って

石坂 妙・立石 アサエ・辻 明子

ミュージアムパートナーズクラブ「雁回山の植物を見る会」

### 1 はじめに

2010年の「くまもと自然と文化の学芸員」養成講座(熊本県地域振興部文化企画課博物館プロジェクト班)に端を発するミュージアムパートナーズクラブ「雁回山の植物を観る会」は2020年に活動10年目を迎えた。これを節目として、これまで植物に興味を持ったことすらないメンバーもいる中で、植物学的な講座や標本作製に取り組み、感想や考えを持ったのかなど、活動への思いをつづった。

### 2 雁回山の変化 石坂 妙

熊本県博物館ネットワークセンターの前身である松橋収蔵庫の植物講座から誕生したこの会も、多少の人の出入りがあるものの十周年も経過したのは、皆の植物を「知りたい」という思いではなかろうか。

私はというと、植物ましてや山になど関心もなく、名前はおろか季節毎に咲く花もあまり知らないという有様なのに、なぜここまで続けられたのかふしぎである。

又、この十年間に雁回山の植物も程度の差こそあれ、様変わりしているのも事実である。そこで、山の変化を見続けた者としてというのは少し大袈裟だが、二つの植物を例にとって述べてみたいと思う。

そこに共通するのは、現代風にいうと「ニート」に集約されるのではないだろうか。

まず一つめは、「ギンリョウソウ」(銀竜草)だ。最初に見た時は、「ナニコレ」という感じだった。だが、毎年見続けていると少しずつその特性がわかり親近感さえもてるようになった。大体どのあたりで見られるのかわかってくると、それを捜す目的や楽しみが増してくるものである。その白き美しい様相から、日本ではあまり褒め言葉で言われることはないらしいが、隣の国中国では、その白さから「水晶蘭」と呼ばれ珍重されているという。何故こうも植物に対する違いが別れるのであろうか。私たちが目にする「ギンリョウ

ソウ」は、暗い林の中で銀色の姿をしていることから、初めて出会うと驚きもあり「幽霊茸」とも言われるらしい。葉緑体をもたず、落葉等から出る養分を吸収して生きているという。花は花茎の先の一つだけつけ、下を向いて咲き、果実は液果で熟するとそのまま腐ったようになり、小さな種子を落とす。茎は分枝せず、葉は茎に互生して多数つく。しかし、雁回山では、熊本地震前後からこの植物があまり見かけられなくなったように思える。暗くある程度の湿り気がある場所が減少している気がしているのは私だけではないのか、という気がしてならないのである。

山に行くと気づくことであるが、全体が明るくなりすぎているように感じられて、徐々に下草も減少しているような感じがして仕方がない。つまり、この「ギンリョウソウ」にとっては、最早住む場所ではなくなったのではないかと危惧さえしている。

次に「ナンバンギセル」(南蛮煙管)についてである。最初にそれを見た時は、日当たりのよいススキの原で、7本くらいが見つかったり、通り一遍の思いしか感じていなかった。次にそれが大量に群生しているのを阿蘇の小径で見かけた時、その存在をはっきりと認識したのを覚えている。翌年、(雁回山で)一面ススキが刈り取られガッカリしたのであるが、刈り取られたのが幸いしたのか、一面「ナンバンギセル」の原っぱに変化していたのである。

「ナンバンギセル」とは、ススキの根に寄生する一年生の寄生植物で、茎は短く地中にあり伸ばした花茎の先に紅紫色の花冠が目立ち、煙管に似ている。イネ科植物(イネ、ススキ、サトウキビ)などの根に寄生し、宿主の成長が阻害される、ありがたくない植物でもあるらしい。

このように二つの植物について書いてみただけだが、私たちは暑い寒いと感じれば、自由に衣服や部屋の温度を調節してしまえば済むが、植物はその存在を示す手段として、そこでの存在を消し去り新天地を求めて移動するか耐えてしまうかしか方法がないのかと思ってしまう。

そう考えてしまうと、現在地球温暖化が叫ばれて久しいが、ついでれのための温暖化か考えさせられてしまう。

植物にとって一番いい環境とは、私たちにとってもそうだが、永遠の課題ではないだろうか。

こう書きながらこの十年間に消え去った植物が意外と多いように感じているのは、私だけだろうか。

本稿を執筆するにあたって、参考にした文献を紹介する。

「日本の野草」五, VI 菅原久夫(著) 小学館(1994)  
「熊本の野草」上 熊本日日新聞社(1966)

### 3 活動を通して感じたこと 立石アサエ

植物観察会への入会動機は、平成22年「くまもと自然と文化の学芸員」養成講座を受けたのを機に、平成23年より参加し現在に至っている。

雁回山が主な観察会では、植物の分布、植生、季節による違い、カクレミノのように成長段階による葉の違い、雁回山の歴史、山あいの岩場にある修行の場と思われるところの観察。一つの山にルートが多いのも魅力で、観察場所が林道沿いだけの為、山林内には未知の植物であるのではというワクワク感もある。キノコの観察では1回に57種ほど発見できた。植物の名、それぞれの植物の生きぬく技、ハコベのように抜いても節が途中で切れ根が残ったり、植物の花や香り、樹木の実で鳥を誘い、イヌビワやムベなどが果実で昆虫を呼び込む術、希少植物のホンゴウソウ、シロシヤクジョウ、アキザキヤツシロランは老眼では見つけにくい。講師の観察のお陰である。観察会で訪れた天草で見かけたけなげなミミカキグサも印象深い。

観察会の観察に参加していればこそそのことで、小さな植物達、時を超えても残って欲しいと願うばかりである。植物に関連する昆虫の生態、群れで越冬するヒメジョウジナガカメムシの色の美しさ愛らしさ。蝶が食草ミツバの株に飛来し、成長に必要な卵を1個だけ産みつけ、別の株にまた産みつける。鳥類に至っては、ノスリ、サンバ、ハチクマの飛来。小型の鳥たちにもぎやかな合唱隊だ。

「観察会の自然を大切にする」という教えていただいた事の実践として、まずは身近なところからで我家の後方の里山、最近是人影も見かけなく荒れた林道の落葉や枯れ枝の清掃を頑張っている。それは日本の国土を守るために1人でもできることだと思っている。観察会に参加した当初は一度に見る種類が多すぎて何回聞いても覚えられず、これは何ですかの質問ばかり

りしていたが、10年以上続けていると、今ではそれは〇〇ですといえる自分に変わっている。学ぶ事の果てなし、分かった時の喜び、次回観察会への楽しみ、大自然との触れあい、観察会は自然界の百科事典と感じる。このような生き甲斐の場を設けていただき、山江村には知り得ない環境に感謝しながら雁回山を目指し、今日も高速道路を走っています。

### 4 「植物標本作製会」に参加して 辻明子

「植物標本作製会」に参加した動機は、水分を抜くための新聞紙(脱水紙)替えて、採取した植物を見る回数が増えるから、名前を覚えられるかもしれないということ。山中で丁寧に教えてもらうのだが、名前を忘れる。結果は、覚えはするが、長期にわたって観察を怠っているとやはり忘れる。自分の場合は、日々怠りなく、かつ楽しんで植物に親しむしかなさそう。

標本作製は、講座で学んだのを活かすように努めた。新聞紙の取り替えは、出来映えに大いに影響した。学んだ通りにこまめに替えると葉緑素はよく残り、サボると抜けて枯れた状態に近くなる。残念ながら後者が多かった。水分が抜けてくると植物は平面的になり、野外観察時の印象が変わる。また、細い茎を持ち上げると標本全体が持ち上がり、組織のつながりの強さを感じた。「水害で浸かった標本を元に返す」というニュースを見たが、これなら返すかもと納得した。できた標本を、水を吸わせて元にかえしたら、どうなるのだろう。干し椎茸のような乾物は、見た目は採りたてのように蘇る。また、山中と違っていつまでも標本を見ることができ、細部の有り様に注意がいった。いつも大ざっぱに観ている自分に気づく。最後はできた標本を白い台紙に貼る。思いがけない芸術作品(デザイン)になっていることも感激した。

地球温暖化のためか、子どもの頃身近にあった植物の姿が見えなくなったものもある。標本が後世、ああこんな植物があったのかと思われないような地球であって欲しい。